

Bodhicaryāvatāra の自他平等論は なぜ禅定章に置かれたか

石田 智 宏

1. はじめに

Bodhicaryāvatāra (BCA) には、自他の平等を述べる詩群（以下、自他平等の詩群と呼ぶ）がある。この詩群は、その前半 (BCA VIII-90~119) において自己と他者の平等性（以下、自他平等の項）を、後半 (BCA VIII-120~173) において自己と他者を置換える冥想観察（以下、自他転換の項）を説いている。本書は六波羅蜜にもとづき菩薩の修行について述べるものであるが、この詩群は、サンスクリット本の存在する現行の版本（以下、現行本と呼ぶ。チベット語訳あり）では禅定章に置かれ、敦煌出土文献にみられる同書のチベット語訳異本 (*Bodhisattvacaryāvatāra* = BSA. 以下、敦煌本と呼ぶ) では精進章に位置している¹。これまでの研究から、敦煌本が現行本に先行し、より初期の形に近いと推定されているので²、それにしたがえば、この詩群は精進章から禅定章に移しかえられたことになる。

この詩群がどの章に帰属すべきかという問題は、すでに諸注釈において議論されている³。その議論においては、このトピックがどの章に置かれるべきかという点のみが問題とされているが、両本の間にはこの詩群そのものに相違があり、その点も考慮しなければならない⁴。本書ではさらに、精進章・禅定章のこの詩群を除いた部分においても両本間にかなりの詩数の差があるので⁵、この詩群の研究においては、1) 敦煌本精進章におけるその位置づけ、2) 現行本禅定章におけるその位置づけ、を検討する必要があるだろう。

以上の問題について、私は先に「自他平等」というトピックを全体として扱い、主として1) について考察を加えた⁶。本稿では両本にお

けるこの詩群そのものの相違を中心として上記 2) について考察し、自他平等の詩群が現行本でなぜ禪定章に移しかえられたのかを探りたい。なお、精進章・禪定章は、現行本ではそれぞれ第 7 章・第 8 章、敦煌本ではそれぞれ第 6 章・第 7 章に相当する。

2. 現行本禪定章の構成と両本の詩の対応

はじめに、自他平等の詩群が現行本禪定章において占める位置、および両本の禪定章に含まれる詩の対応について概観する。現行本禪定章(チベット訳)は前半部(vv. 1~89)・後半部(vv. 90~173:自他平等の詩群)・結論部(vv. 174~187)より構成され、前半部と結論部(計 103 詩)とがおよそ敦煌本禪定章(全 58 詩)に対応する。細部の相異を除けば、両本はそのうち 36 の詩を共有し、67 の詩が現行本に独自のものである。両本で対応する 36 の詩についても、その配列順序はかなり異なっているため⁷、全体として両本の禪定章の隔たりはかなり大きいといえよう。

次に、自他平等の詩群の両本における対応を示そう。

BCA VIII (禪定章)		BSA VI (精進章)
【前半：自他平等の項】		
<u>90</u>		—
<u>91~94, 95~99</u>	} = (B) = (A)	34, 35**, 36**, 37~42
<u>100</u>		—
<u>101</u>		43**
<u>102, 103~112, 113</u>		—
<u>114, 115, 116, 117, 118, 119</u>		44, 45, 46ab**, 46cd~49
【後半：自他転換の項】		
120~134		50~61, 62*, 63*, 64
<u>135</u>		—
136~138		65~67
<u>139, 140, 141, 142~154</u>		—
155~166		68~74, 75*, 76, 77, 78, 79
<u>167</u>		—
168~173		80, 81*, 82~85

この表では、左に現行本、右に敦煌本を配置した。同一の行に置いた詩は、両本に内容上の対応関係がみられることを示している。イタリックは敦煌本に対応する詩のない現行本の詩を示す。敦煌本において*を付した詩には現行本と細部の相違があり、**はそれが著しいことを示す。無印は全く同一か、語句レベルの相違はあっても同一の原文を想定できる詩である。本稿で言及する詩に下線を付した。詩群(A)、(B)の表示は小節4-4の叙述の便宜のためである。

自他平等の詩群は、現行本が84の詩、敦煌本が52の詩よりなる。一見して明らかのように、詩数の差32はすべて現行本にのみ存在するものであり、敦煌本に存在する52の詩は細部の相違を除けばすべて現行本に含まれている。両本の他の部分では、現行本のみに見られる詩、敦煌本のみに見られる詩のほか、各詩の部分的相違などが混在していることに比べると、この部分における両者の相違は比較的単純であるといえよう。以下、現行本にのみ存在するこの32の詩の中の下線を付した詩について検討していく。

3. 現行本禪定章前半部の内容

自他平等の詩群について検討をすすめるに先立ち、現行本禪定章でその前に位置する、同章前半部の内容に一瞥を与える。著者はまず冒頭で、「心を三昧に安立すべきである」(v. 1)⁸とし、さらに「止 *śamatha* によって観 *vipaśyanā* をよく備えた者は煩惱を滅ぼすと知って、まずはじめに止を追求すべきである。」(v. 4)⁹と述べ、章の目的が煩惱を滅するための三昧であるとする。ついでこの世における欲望・人間関係の空しさから孤独を求めるべきであるとし(vv. 5～38)、心一境性と三昧に努めるべきであるという(v. 39)。この後、不浄観(vv. 40～70)、欲望を求める者の苦しみと空しさ(vv. 71～82)を述べ、欲望を離れて孤独 *viveka* に住し、菩提心を修習すべきであるという(vv. 83～89)。同章前半の最終詩である第89詩は次のようにいう。

BCA VIII-89

このようなやりかたによって孤独のすばらしさを観察修習し (bhāvanāt)、あれこれの考えを止め、菩提心を観察修習するべきである (bhāvayet)¹⁰。

以上が現行本禪定章の前半に相当するのであるが、Crosby と Skilton も指摘するように、その趣旨は瞑想そのものやその実践方法についての解説より、瞑想の必要性を述べることに重点がある¹¹。その後自他平等の詩群が続く (vv. 90 ~ 173)、最後に身体への執着を捨てること (vv.174 ~ 184) と三昧への決意を述べる (v. 186)。

現行本禪定章の前半において以上のように瞑想の必要性が述べられた文脈よりすれば、それに続く自他平等の詩群は、関連はするものの、新しいトピックであるといえることができる。La Vallée Poussin はこの詩群を瞑想の応用例であると見なしている¹²。

4. 自他平等の項

本節では自他平等の項の中から、現行本第 90 詩と第 100 ~ 113 詩、および敦煌本第 43 詩に焦点をあてる。

■ 4-1. BCA VIII-90 の性格

第 90 詩は現行本において自他平等の詩群の冒頭に位置するが、対応する詩は敦煌本に存在しない。敦煌本とほぼ共通の第 91 ~ 99 詩の直前に位置するこの詩の存在は、現行本において何を意味するのだろうか。第 91 詩とともに示そう。

BCA VIII-90

まずはじめに、次のように注意深く自己と他者の平等性を観察修習せよ (bhāvayed)。すべての者は等しい苦楽をもつ [のだから]、私は自分自身と同様に [かれらを] 護らなければならない¹³。

BCA VIII-91(= BSA VI-34)

手などの部分によって多くの部位からなる身体が、ひとつのもの

として護られなければならないように、分かれてはいるが苦樂を同じくするものであるこの世間は、すべてこれと同じである¹⁴。

前節で見たとおり、自他平等の詩群は直前までの文脈に対して新たなトピックである。そこで第90詩は、以下の詩群のテーマを端的に示し、標題詩ともいうべき性格をもっていることがわかる。もし現行本にこの詩がなく、聴衆が第89詩（前掲）に続いて第91詩を聞いたならば、話題の転換が曖昧だけでなく、唐突の感もぬぐえないであろう。したがって現行本は、第90詩によりスムーズに話題が転換しているということができる。一方、敦煌本では精進章後半にこの詩群が置かれている。そこに標題を示すものはないが、章のはじめに内容を一覽する詩（BSA VI-2）が詠みあげられ、あらかじめ「自他の平等」というトピックが予告されているため、話題の転換に対する曖昧さはそれほど大きくはなかったことが推測される¹⁵。したがって、この詩群を敦煌本精進章から現行本禪定章に置くに際し、直前までの文脈から違和感なく話題を転換するために第90詩が加えられ、この詩の存在により違和感が軽減されたと考えることができる。

またそのとき、第89詩は孤独を「觀察修習し」bhāvanāt、菩提心を「觀察修習せよ」bhāvayetと述べ、第90詩は自己と他者の平等性を「觀察修習せよ」bhāvayetと述べていることに注意したい。第89詩までの前半部と自他平等の詩群という、本来異なったテーマの両者の接合は、そのままではいわば木に竹を接いだような印象になりかねず、√bhūの使役形およびその派生語をくり返し用いることによって、モチーフの連続性を示そうとしたと考えることができるかもしれない。

■ 4-2. 世間は一体である：BCA VIII-92~94, 114 (= BSA VI 35~37, 44)

次に検討すべきは現行本第100～113詩であるが、この一連の詩は、前後の詩群と対照させることによって内容の特徴が明確になる。それは他者を（苦から）護る根拠と自我に対する態度という二点にまとめることができる。この小節4-2では前者について、次の小節4-3で

後者について、前後の詩群の論旨を確認する。

まず直前の詩群の中から第 92～94 詩を示す。(以下、BCA の詩について註には基本的に梵文をあげるが、のちの叙述のなかで敦煌本を参照する便宜のため一部 BCA のチベット訳をも挙げた。ただしその場合も和訳は梵文にしたがった。)

BCA VIII-92 (≡ BSA VI-35)

たとえ私の苦が他者の身体を苦しめることがないとしても、その苦は私にとって自我への愛着ゆえに耐えがたいものである¹⁶。

BCA VIII-93 (≡ BSA VI-36)

同様に、他者の苦が私自身によって知覚されることはないとしても、その苦は彼にとって自我への愛着ゆえに耐えがたいものである¹⁷。

BCA VIII-94 (= BSA VI-37)

私は他者の苦を滅ぼさねばならない。〔それは〕自らの苦のように苦であるから。私は他者をも助けなければならない。自らが生けるものであるように〔かれもまた〕生けるものであるから¹⁸。

著者は現行本第 91 (前節)～94 詩において、世間は、苦楽を共にしているという点にもとづいて一体のものと理解され、一体のものとして保護されるべきである、と考える。その「苦楽を共にする」ことの説明として、苦は自我への愛着ゆえに堪えがたいという点で自己にも他者にも共通であるという。第 92 詩の「自我への愛着」は、敦煌本 (v. 35) では「自己の身体への愛着」となっている¹⁹。いま、世間を一体視することにより他者 (衆生全般) を保護するべきであるとする点に注目すると、この趣旨は現行本のみ存在する第 100～113 詩にはなく、その部分をとばして現行本第 114 詩 (=BSA VI-44) に次のように連続する。

BCA VIII-114 (=BSA VI-44)

身体の一部であることにより手などを愛するのと同じように、
なぜ生けるものたちを世間の一部であるとして愛さないか²⁰。

この詩は衆生を愛するべき理由を、衆生が世間の一部であることに
求めるが、これはほぼ現行本第 91 詩 (= BSA VI-34) の言いかえであ
り、第 100 ~ 113 詩の前後において、衆生を愛し、苦から護るべき理
由としての一貫性があることが確認される。

■ 4-3. 身体と自我：BCA VIII-115, 117 (=BSA VI-45, 47)

次に、現行本第 100 ~ 113 詩直後の詩群にみられる自我に関する記
述を第 115・117 詩にみてみよう。

BCA VIII-115 (= BSA VI-45)

この無我なる自己の身体に習慣によって「我」という思いが〔生じ
る〕のと同じように、他者に対しても反復によって「我」〔意識〕
がどうして生じないであろう²¹。

BCA VIII-117 (= BSA VI-47)

それゆえ、あなたが苦痛や悲しみなどから自分自身を護ろうと願
うのと同じように、世間に対して保護の心と慈悲の心とを反復す
るべきである²²。

この二つの詩は、無我なる自己の身体に対して習慣によってい
「我」という思いを他者にもいだき、世間に対して保護の心をおこせと
いう。いうまでもなくこの詩は BCA VIII-114 (= BSA VI-44) からの連
続性をもつが、敦煌本ではさらに第 35 詩における「自己の身体への愛
着」という表現 (4-2 節) が伏線にあると考えることができよう。いま
は他者に対して「我」という意識をいだき、慈悲心を反復すべきであ
るという論理を確認しておく。

■ 4-4. 苦の主体は存在しない：BCA VIII-100~102, 113

次に現行本第100～113詩の検討にうつる。まずその要点となる第100～102詩を直前の99cdより示す。

BCA VIII-99cd

足の苦は手の〔苦〕ではないのに、なぜそれ（足の苦）がそれ（手）によって護られるのか²³。

BCA VIII-100

そ〔のような反応〕は理に叶わないけれども自我意識から (ahaṃkāra) 起きるのだと〔君が〕いうならば、〔こう答える：〕理に叶わないことは自己のことで他者のことで、できるだけ取り除かなければならない²⁴。

BCA VIII-101 (cf. BSA VII-43：後出)

相続と集合体とは〔蟻〕行列や軍隊などと同じように虚妄である。苦がそれに属するところ〔の主体〕は存在しない。だからそれは誰に属するものでありえようか²⁵。

BCA VIII-102

すべての苦は、差別なくその帰属する主のないものである。まさしく苦であるという理由でとり除かれねばならない。なぜそれに制限されることがあろうか²⁶。

第99詩cdは「足などに打擲が加えられるのを見て手を伸ばして〔足の苦を〕護る」²⁷ことをいうのであり、著者はそれを「自我意識」によって説明し、それは取り除かれねばならないと述べる (v.100)。ついで苦の属する主体は存在しないといい (v. 101)、自我などの存在を否定する²⁸。以上をまとめて、他者の苦が取り除かれるべき根拠は、苦の主体が存在せず、苦は苦であるからだとする (v.102)。この一連の詩の結論は、最終部分である113cdで次のように述べられる。

BCA VIII-113cd

自我〔意識〕(ātmabhāva/ bdag 'dzin)を捨てることと他者を受け入れることとを觀察修習せよ (bhāvayet)²⁹。

この詩にみられる「自我〔意識〕」ātmabhāva/ bdag 'dzin³⁰は、現行本第100詩の「自我意識」ahaṃkāra/ bdag tu 'dzin paを受けていると思われる。第100詩と第113詩とはこの詩群 (vv. 100~113) の冒頭と最終詩であるから、この詩群の関心が自我〔意識〕にあることは明白である。

ここで便宜上、現行本第91～94・114・115・117詩を詩群(A)、第100～102・113詩を詩群(B)として、先に提示した二つの観点から両詩群の内容を比較してみよう。

まず他者の苦を取り除くべき根拠について、(A)はそれを「苦性」が共通であることから世間の一体性に見いだすのに対し、(B)はそれを苦の主体の非存在性という存在論的な解釈に求め、さらに苦が苦であるからとしており、両者の論理は全く異なっている。しかも(B)には(A)の前後一貫した文脈の中にわりこんでいるという不自然さもある。この第100～113詩の核心である第101～103詩が自我という苦の主体の非存在性を慈悲や倫理の直接の根拠とすることに対して、Williamsは菩薩道を滅ぼすものであるとし³¹、Schmithausenは仏教の一般的考えかたではないとしてŚāntidevaの意図を疑った³²。

次に自我に対する態度について、(A)に見られるのは、無我なる他者の身体に「我」との思いをおこし、それによって他者を自己とみなす慈悲であり、共感である。このとき自我は捨てられるのではなく、他者に対して反復(修習)される対象であり、慈悲をいただくための媒介的役割を担っている。自我の存在を否定し自我意識は取り除かれるべきであるとする(B)とは明らかに異なっている。

ところで(B)で主張される、苦の主体の存在の否定は、本書では般若章(BCA IX章/BSA VIII章)における無我論の中で詳細に論じられ

ている³³。たとえば現行本般若章第 102 詩は、次のように述べる。

BCA IX - 102 (=BSA VIII-71 cd~72ab)

いかなる感受の主体も存在しない。したがって真実としては感受は〔存在し〕ない。この集合体（身体）に我がないのであれば、それがこのようにこ〔の感受〕によって苦しむであろう³⁴。

この詩で身体を無我なるものとみなすのは現行本第 115 詩と同じだが、その主眼は感受と感受者の非存在を述べることにある。したがって、詩群 (B) の趣旨はこれを先取りしたものであることができる。他方禪定章の詩群 (A) は、身体を無我としながら、自己の身体に対するのと同じように「反復によって」他者に対して自我〔意識〕を生じるように導き (v. 115)、世間への保護と慈悲の心を反復する際にこの自我に媒介的要素を見いだす点で (v. 117)、詩群 (B) や般若章の無我論と異なることがわかる。

ところで、この詩群では唯一、第 101 詩が敦煌本に対応する詩 (BSA VI-43) をもつが、この両詩は相違が著しい。第二節の表では、その a 句が同じであることから形式的にこの詩を敦煌本 43 詩と対応させたが³⁵、実際には別の詩ともいうべき内容であり、しかもこの詩群 (B) と敦煌本の性格を知る上で重要な意味をもっている。

BSA VI-43 (cf. BCA VIII-101)

相続と集合体とは花網³⁶ や水の流れや森林帯のように³⁷、記憶と知識のなかの妄想であって、世間はすべて心である³⁸。

現行本第 101 詩は苦の主体、すなわち自我の非存在を述べていたが、敦煌本第 43 詩には、苦の主体の非存在という、現行本において最も重要なメッセージがないのである。したがって、敦煌本が現行本に先行したとすると、この部分においては敦煌本の一部が現行本において拡大されたのではなく、敦煌本第 43 詩に変更を加えることによって、他

者の苦が取り除かれるべき根拠として苦の主体の非存在という新たな論理を生んだことになる。先に小節 4-2 において、敦煌本第 35 詩で苦の原因を「自己の身体への愛着」と述べる部分が現行本第 92 詩（と 93 詩）では「自我への愛着」となっていると述べたが、これも詩群（B）が苦の主体の非存在性の議論をくりひろげることと関係するかもしれない。以上、現行本の詩群（B）には苦の主体の非存在性の論理が見られ、それが他者を苦から護る根拠として位置づけられている、とまとめることができよう。

5. 自他転換の項

■ 5-1. BCA VIII-135

自他転換の項の両本における相違のうち、以下では現行本第 135 詩と第 139～154 詩をとりあげる。この小節で扱う第 135 詩については、前節に続き自我の扱いが問題となる。それはこの詩の前後の詩との内容の比較により明らかとなるので、それらの詩のいくつかを示そう。

BCA VIII-120 (= BSA VI-50)

自他を速やかに救おうと願う者は、自他の転換という最高の秘密を説くべきである³⁹。

BCA VIII-121 (= BSA VI-51)

自我に対する過度の愛着からほんのわずかの危険によって恐れが生じる。敵のように恐れをもたらすこの自我を、誰が憎まないであろう⁴⁰。

BCA VIII-126 (= BSA VI-56)

自我のために他を苦しめれば、その者は地獄などで苦しめられる。しかし他のために自我を苦しめれば、すべて幸ある者となる⁴¹。

BCA VIII-128 (= BSA VI-58)

自我のために他に命令すれば、後に従属感などを味わうことになる。しかし、他のためにかれ（自我）に命令すれば、支配者たることなどを味わうことになる⁴²。

第 120 詩は以下の主題が自他の転換であることを示している。その後、自我は憎むべきものであるとするが、「過度の」愛着と述べる点は、自我を全面的に否定するのではなく、媒介として利用する立場を示唆するであろうか。そこで、他者のために自我を苦しめたり自我に命令したりすること、つまり「他者」に資する立場から自我に対峙することをすすめている。さらに第 134・136 詩は次のように述べる。

BCA VIII-134 (= BSA VI-64)

苦しみや危険が多いほど世間には苦難がある。それらすべては自我を保持することにもとづいて起きる。その保持は私にとってどんな用があらうか⁴³。

BCA VIII-136 (= BSA VI-65)

それゆえ自己の苦しみを、他の苦しみをしずめるために、私は自我を他の人びとに与え、他の人びとを自我として受けとめる⁴⁴。

この二つの詩では、自我を保つことは無益であるとしながら、自・他の苦しみをしずめるために自我を媒介に他者を自分自身とみなすことを述べている。この詩は、第 120 詩で述べる自他の転換とは他者を「我」とみなすことにある、と説明するものである。これに対し、この両詩の間に位置する第 135 詩（敦煌本に欠）は次のようにいう。

BCA VIII-135

自我を捨てずに苦しみを捨てることはできない。それは火を捨てずに火傷を免れることができないのと同じである⁴⁵。

この詩は苦しみを捨てるためには自我を捨てねばならないという。前後の詩は、自我に固執することは無益だが、苦しみをしずめるために自我を媒介に他者を自分自身とみなすという方法をすすめるものであった。したがって第 135 詩の自我を扱う視点は明らかに前後の詩と異なっているものであり、詩群 (B) に含まれる現行本第 113 詩 cd と同趣旨のも

のとみなすことができるであろう。

■ 5-2. ねたみとおごり：BCA VIII-139~154

この詩群（敦煌本に欠）は、第 140 詩が全体の内容を要約していると考えられるので、まずそれを示そう。

BCA VIII-140

劣った者などを自分自身と見なし、自分自身を他であるとも見なし、ためらいの心なく嫉妬（ねたみ）と慢心（おごり）とを観察修習せよ (bhāvaya)⁴⁶。

BCAPt によれば「劣った者を見て慢心が、同等の者を見て競争心が、優れた者を見てねたみが生じるのが愚かな凡夫の性であり」、「これはすべて煩惱の原因であるけれども、自己と他者を置き換えることによって（煩惱を）浄化する根拠に転化させるのである」⁴⁷という。そしてこの優れた者に対する嫉妬・同等の者に対する競争心・劣った者に対する慢心を観察する実践が、第 141 ~ 154 詩で具体的に説明される。一例として、ねたみを主題とする第 141 詩は次のとおりである。

BCA VIII-141

この者は尊敬され、私はされない。私はこの者のように持てる者でない。この者は賞賛され、私は非難される。私は苦しみ、この者は幸せである⁴⁸。

こののち、一人称で示される「私」が三人称の「この者」に対し嫉妬・競争心・慢心をいざくことがさまざまに描写されるが、そのすべての観察において述べられる心理状態に対して他者と自己を置き換えることによって、自らの心を衆生の上におくべきであるとする⁴⁹。

第 140 詩は、自我（自分自身）の意識を自在にあやつること、すなわち自他の置きかえをすることによって嫉妬と慢心とを観察すること

を述べている⁵⁰。ここでは、この詩によって要約される第139～154詩の記述に僧院生活のにおいを感じとり、その背景に著者の活動したコミュニティの影響を推定する論考のあることを指摘して⁵¹、この詩群の趣旨が、ねたみとおごりの観察修習であることを述べるにとどめる。

6. 自他平等の詩群の精進章への配置について

以上において、自他平等の詩群のうち現行本のみに見られる詩の特徴が明らかとなった。それをまとめよう。

- ①この詩群の標題を示す詩(v.90)は、この詩群が直前の詩に違和感なく連続し、禪定章に配置されるために不可欠である。
- ②現行本は衆生の苦を取りのぞく菩薩の実践の根拠を苦の主体(自我)の非存在性にあるとし、自我と自我意識を捨てよという(詩群(B)とv.135)。これは詩群(A)が同じ慈悲の実践の根拠を世間の一体性に求め、自我を修習し、自我を媒介として自他の置きかえという実践をすすめる議論と異質である。
- ③ねたみとおごりの観察修習(vv.139~154)がある。

では以上の特徴は、どのように自他平等の詩群の禪定章配置に関係するであろうか。自我の非存在性という、空性を視野にいたした存在論的考察、そこから結論される自我の捨離の観察修習、そしてねたみとおごりの観察修習とは、「精進」という述語の一般的概念にはなじまず、「禪定」の項目下に置くほうが理解しやすいとはいえそうである。また自我の非存在性に関わる考察を般若章に説かれる無我論の先取りとみなせば、精進章より般若章直前の禪定章に位置するほうが隔たりが少ない。つまり、現行本の自他平等の詩群は、これらの要素を含んだことにより、精進章より禪定章に配置されるべき適性を備えるに至ったと考えることができるであろう。

さてこのような内容一般の性質からの推測とともに、上記の特徴に関してはもうひとつ別の視点から検討が可能である。それは自我の非存在にもとづく自我の捨離とねたみとおごりの考察とについて、現行本が「観察修習せよ」(bhāvyet/ bhāvaya)という語を用いている点に注

目するものである。自他平等の詩群において「観察修習」(bhāvanā/ (b)sgom pa)という語、およびその動詞形を用いる詩は四例あり、それらは現行本第 90, 107, 113, 140 詩である。一方、敦煌本の当該詩群にはこの語が用いられる詩はない。そのうち第 107 詩以外の三例は、前後の文脈の標題的性格、あるいは前後を要約する性格をもつものであることが興味をひく。すなわち、第 90 詩はこの詩群全体の標題を提示し、第 113 詩は詩群 (B) を要約し、第 140 詩はねたみとおごりの観察修習 (vv. 139 ~ 154) を要約しているのである。換言すれば、自他平等の詩群の中で現行本のみに含まれる詩は、第 135・167 詩を除き、すべて観察修習というキャッチフレーズをもつ三つの詩 (vv. 90, 113, 140) にまとめられているのである。この三詩は現行本のみの特徴としてまとめた①~③を代表するものである。

bhāvanā/ (b)sgom pa という語の意味は広く、本書においては修習全般に適用しうるが、以上の三つの詩ではいずれも冥想・観察の側面が大きいと思われる。敦煌本のこの詩群は、内容としては bhāvanā の要素を多分にもつが、文字づらにおいてそれは示されていない。

さらに興味深いのは、そのうちの二つの詩が、Dharmapāla (10 世紀 ~ 11 世紀初) 編による BCA の主要詩頌抜粋集 BcaSP と BcaP に採用されていることである。両書は BCA からそれぞれ 30, 81 の詩を抜粋するに際し⁵²、自他平等の項からは第 90 詩と第 113 詩とを採用した⁵³。つまり編者はこの項について、敦煌本に含まれる詩ではなく、現行本にのみ存在する二つの詩を選んだのである。このことは、彼がそれら二詩のもつ標題的要素及び要約的性格や、自他平等と自我の捨離との観察修習を重視したことを示すと同時に、自他平等の項は、現行本のみに含まれる詩が加えられたことによって大きくその性質を変化させ、またこの項に対する見方も変化したことをも示唆するといえよう。その場合、苦の主体の非存在性という存在論的考察から自我を捨てるという観察修習がクローズアップされることにより、この詩群は精進章ではなく、禪定章へ配置されるほうが妥当であると考えられたことを推定できるのではないか。

斎藤博士によれば、現行本の原本の成立は十世紀後半頃かとされている⁵⁴。Dharmapāla の活躍年代はほぼこの時期であり、BcaSP と BcaP に引用される本書の訳文には、現行本に一致するものだけでなく敦煌本に一致する例もあるため、敦煌本から現行本への移行期において両本の詩が混在して伝承されていた形跡をとどめていると考えられる⁵⁵。したがって、そこに引用された第 90 詩と第 113 詩の存在は、わずか二つの詩であるとはいえ、現行本の成立ときわめて近い時期の自他平等の項に対する理解として注目され、この詩群が禪定章に配置された背景を知る手がかりと位置づけることができるであろう。

この詩群の配置問題に関する注釈家の議論では、すでに指摘されたように、BCAK が「禪定と般若とを主要なものとする『自他の平等性』と『自他の転換』」といい、BCAVa が「『自他の平等』と『自他の転換』とは禪定を主要なものとするから、その（禪定の）章で説かれるであろう」という⁵⁶。敦煌本のこの詩群では観察修習 ((b)sgom pa) あるいはそれに類する冥想を端的に示す表現がないのに対し、現行本のみが存在する複数の詩が「観察修習」(bhāvanā) を述べている。とくに自我の捨離の観察修習がその代表とみなされたとすれば、それはこの詩群のもつ性質としての「禪定における観察」という側面を代表したものでいえよう。それゆえ注釈家はこの詩群に「禪定を主要なものとする」という定義を与えたのではないだろうか。

7. まとめ

以上、自他平等の詩群のうち現行本にのみ存在する詩の特徴は、他者の苦を護る根拠としての自我という苦の主体の非存在性（無我）の考察という新たな論理とそこから導かれる自我の捨離、およびおごりとねたみの観察修習であることを論じた。さらに、これらの詩が標題的性格をもち、その観察修習を説く詩こそがこの詩群を代表するとみなされるようになったために、この詩群は内容的に冥想にふさわしく、禪定章に配置されることになったのではないか、という可能性を提示した。

<テキストと略号>

- BCA Bodhicaryāvātāra (Śāntideva) .L. de La Vallée Poussin (ed.), Calcutta 1901-1914.
- BCABu Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa, Byaṅ chub kyi sems gsal bar byed pa, Zla ba'i 'od zer (Bu ston Rin chen grub). Lokesh Candra (ed.), *The collected Works of Bu-ston*, Part 19, Śatapiṭaka Series, vol. 59, 181 - 602, New Delhi 1971 (repr. of the Lhasa Źol edition, Dza fol. 1 - 211b6).
- BCAK Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i legs par sbyar ba (Kalyāṇadeva). D 3874 (Śa), P 5275 (Śa).
- BCAP Bodhicaryāvātārapañjikā (Prajñākaramati). See BCA.
- BcaP Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i don bsud pa (Dharmapāla). D 3879 (Śa), P 5281 (La).
- BCAPt Byaṅ chub kyi spyod pa la 'jug pa'i dka' 'grel (Prajñākaramati). D 3872 (La), P 5273 (La).
- BcaSP Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i don sum cu rtsa drug bsud pa (Dharmapāla). D 3878 (Śa), P 5280 (La).
- BCAt Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa (Śāntideva). D 3871 (La), P 5272 (La).
- BCAVa Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i dka' 'grel (Vairocanarakṣita).D 3875B (Śa), P 5277 (Śa).
- BCAVi Byaṅ chub kyi spyod pa la 'jug pa'i dgoṅs pa'i 'grel pa khyad par gsal byed ces bya ba (Vihūticandra). D 3880 (Śa), P 5282 (Śa).
- BSA Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa (Akṣayamati (=Śāntideva)). Stein Tibetan No. 628. in Saito (2000).
- BSAP Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i mnam par bśad pa'i dka' 'grel. D 3873 (La), P 5274 (La).
- D Tibetan Tripiṭaka, Derge Edition.
- P Tibetan Tripiṭaka, Peking Edition.
- Saito (2000) Akira Saito, A Study of the Dūn-huá'ng Recension of the Bodhisattvacaryāvātāra, A Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Tsu 2000.

<参考文献 欧文>

- Batchelor (1979) Stephen Batchelor, *A guide to the Bodhisattva's way of life*, Dharmasala 1979.
- Crosby and Skilton (1996) Kate Crosby and Andrew Skilton (tr. with Intro. and Notes), *The Bodhicaryāvātāra*, Oxford/ New York 1996.
- Eimer (1981) Helmut Eimer, "Suvarṇadvīpa's, 'Commentaries' on the Bodhicaryāvātāra," in : K. Bruhn und A. Wezler (eds.), *Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf* (Alt und Neu- Indische Studien 23), pp. 73 - 78, Wiesbaden 1981.
- Finot (1920) Louis Finot, *La Marche à la Lumière*, Paris 1920.

- Lindtner (1991) Christian Lindtner, "Textcritical Notes on Sanskrit Texts, I. Bodhi-(sattva) caryāvatāra", in : *Papers in Honour of Prof. Dr. Ji Xianlin of the Occasion of His 80th Birthday* (II), pp. 651 - 660, Nanchang 1991.
- Poussin (1907) Louis de la Vallée Poussin, *Bodhicaryāvatāra : Introduction à la pratique des futurs bouddhas, Poème de Śāntideva, Traduit du sanscrit et annoté*, Paris 1907.
- Schmidt (1923) Richard Schmidt, *Der Eintritt in den Wandel in Erleuchtung*, Paderborn 1923.
- Schmithausen (1999) Lambert Schmithausen, "Nichtselbst, Leerheit und altruistische Ethik im Bodhicaryāvatāra," in : *Buddhismus in Geschichte und Gegenwart III, Śāntidevas "Eintritt in das Leben zur Erleuchtung,"* pp. 129 - 144, Hamburg 1999.
- Steinkellner (1981) Ernst Steinkellner, *Śāntideva, Eintritt in das Leben zur Erleuchtung, Poesie und Lehre des Mahāyāna-Buddhismus*, München 1981.
- Williams (1998) Paul Williams, *Altruism and Reality, Studies in the Philosophy of the Bodhicaryāvatāra*, Richmond 1998.

<参考文献 和文>

- 江島(1966) 江島恵教『『入菩提行論』の註釋文献について』『印度学仏教学研究』14-2, pp. 644 - 648, 1966.
- 江島(1991) 江島恵教「シャーンティデーヴァのアートマン説批判」『前田専学博士還暦記念論集<私の思想>』pp. 213 - 223, 春秋社 1991.
- 石田(2002) 石田智宏『『入菩提行論』における自他平等の思想—精進章の構成について—』『日本仏教学会年報』67, pp. (113) - (128), 2002.
- 金倉(1965) 金倉円照『さとりの道』平楽寺書店 1965.
- 大西(1999) 大西薫「入菩提行論のレトリック—施物をめぐるねたみ—」『日本仏教学会年報』64, pp. (71) - (89), 1999.
- 斎藤(1986) 斎藤明「敦煌出土アクシャヤマテイ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』pp. 79 - 109, 春秋社 1986.
- 斎藤(1994) 斎藤明「『入菩提行論』の謎と諸問題：現行本第9「智恵の完成(般若波羅蜜)章」を中心として」『東方学』87, pp. (147) - (136), 1994.
- 斎藤(1994a) 斎藤明「初期本『入菩薩行論』にみるシャーンティデーヴァの思想—第8「智恵の説示」章を中心として—」『東海仏教』39, pp. (114) - (98), 1994.
- 斎藤(1996) 斎藤明「『入菩薩行論解説細疏』のシャーンティデーヴァ理解」『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』pp. 594 (355) - 582(367), 春秋社 1996.
- 斎藤(1997) 斎藤明「『入菩薩行論』新旧両本における自我批判」『日本仏教学会年報』62, pp. (49) - (62), 1997.
- 斎藤(2000) 斎藤明「ブトゥンと『入菩薩行論解説[細疏]』」『印度学仏教学

- 研究』48-2, pp. (118) - (123), 2000.
- 齋藤 (2000a) 齋藤明「シャーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の伝承と変容—初期本テキストの発見秘話」、「古典学の再構築」ニューズレター第8号, pp. 11 - 19, 2000.
- 齋藤 (2001) 齋藤明「*Bodhi (sattva) caryāvatāra* と *Śikṣāsamuccaya*」『印度哲学仏教学』16, pp. 353 - 326 ((1) - (28)), 2001.

註

- 1 自他平等の詩群が位置する章の違いについての概要は、齋藤 (1986) : pp.98-100; 齋藤 (1996) : pp.593-591; 齋藤 (2000a) 参照。
- 2 齋藤 (1986) ほか、Saito (2000) : References 所掲の諸論文参照。
- 3 前註1の齋藤論文参照。
- 4 石田 (2002) : pp.115-116 参照。
- 5 齋藤 (1986) : pp.89-90.
- 6 石田 (2002)
- 7 Saito (2000)
- 8 samādhau sthāpayen manaḥ
- 9 śamathena vipaśyanāsuyuktaḥ kurute kleśavināśam ity avetya/ śamathaḥ prathamam gaveṣaṇīyaḥ.
- 10 evamādibhir ākārair vivekaguṇabhāvanāt/
upaśāntaviarkaḥ san bodhictam tu bhāvayet//
- 11 Crosby and Skilton (1996) : p.77.
- 12 Poussin (1907) : p.86.
- 13 parātmasamatām ādau bhāvayed evam ādarāt/
samaduḥkhasukhāḥ sarve pālranīyā mayātmavat//
- 14 hastādibhedena bahuprakārah kāyo yathaikaḥ paripālanīyaḥ/
tathā jagad bhinnam abhinnaduḥkhasukhātmakaṃ sarvam idaṃ tathaiva//
- 15 石田 (2002) 参照。
- 16 BCA yady apy anyeṣu deheṣu maddukhaṃ na prabādiate/
tathāpi tad duḥkhaṃ mamātmāsneḥaduḥsaham//
BCAt gal te bdag gi sdug bśnal gyis// gzan gyi lus la mi gnod pa//
da lta' an de bdag sdug bśnal de// bdag tu zen paṣ mi bzod nid//
- 17 BCA tathā yady apy asaṃvedyam anyaduḥkhaṃ mayātmanā/
tathāpi tasya tad duḥkham ātmasneheṇa duḥsaham//
BCAt de bzin gzan gyi sdug bśnal dag// bdag la 'bab par mi 'gyur yañ//
de lta' an de bdag sdag bśnal de// bdag tu zen paṣ bzod par dka'//
- 18 mayānyad duḥkhaṃ hantavyaṃ duḥkhatvād ātmaduḥkḥavat/
anugrāhyā mayānye 'pi sattvād ātmasattvavat//
- 19 BSA VI-35 (≡ BCA VIII-92) : bdag gi sdug bśnal myi bzad pa// gzan la 'gro bar myi gyur ba// rañ gi lus la chags pa yis// sdug bśnal de nid myi bzod pa// (自分自身の苦は堪えがたいものであるが、他者にふりかかることはない。自己の身体への愛着ゆえにまさにその苦は堪えがたい。) また第93詩には同

様の表現自身がない：BSA VI-36 (≡ BCA VIII-93) : de bzin gzan gyi sdug
bsñal dag// bdag la 'bab par myi 'gyur yañ// rañ gi ñams las dpag byas nas // de 'i sdug
bsñal de myi bzod// (同様に、他者の苦が私にふりかかることはないとしても、自己の心にもとづいておしはかられるから、そ〔の他者〕の苦は堪え
がたい。)

- 20 kāyasyāvayavatvena yathābhīṣṭāḥ karādayaḥ/
jagato 'vayavatvena tathā kasmān na dehinaḥ//
- 21 yathātmabuddhir abhyāsāt svakāye 'smin nirāmake/
pareṣv api tathātmatvaṃ kim abhyāsān na jāyate//
- 22 tasmād yathārtīśokāder ātmānaṃ goptum icchasi/
rakṣācittam dayācittam jagaty abhyasyatām tathā//
- 23 pādaduḥkhaṃ na hastasya kasmāt tat tena rakṣyate//
- 24 ayuktaṃ api ced etad ahaṃ kārāt pravartate/
yad ayuktaṃ nivartyaṃ tat svam anyac ca yathābalaṃ//
- 25 BCA saṃtānaḥ samudāyāś ca pañktisenādivan mṛṣā/
yasya duḥkhaṃ sa nāsty asmāt kasya tat svam bhaviṣyati//
BCAt rgyud dañ tshogs ces bya ba ni// phren ba dmag la sogs bzin brdzun//
sdug bsñal can gañ de med pa// des 'di su žig dbañ bar gyur//
- 26 asvāmikāni duḥkhāni sarvāṅy evāviśeṣataḥ/
duḥkhatvād eva vāryāṅi niyamas tatra kiṃ kṛtaḥ//
- 27 BCAP 333.9-10 : pādādu prahāraṃ patantaṃ dṛṣṭvā hastaṃ prasārya rakṣyate//
- 28 BCAP 333.9-11 : evam ātmādeḥ svāmiṇaḥ kasya cid abhāvād yasya saṃbandhi
duḥkhaṃ sa nāsti/ ataḥ kasya tad duḥkhaṃ svātmīyaṃ bhaviṣyati/ naiva kasya cid
ity arthaḥ//
- 29 BCA ātmabhāvaparitṛyāgaṃ parādānaṃ ca bhāvayet//
BCAt bdag 'dzin yoñs su dor ba dañ// gzan blañ ba ni bsgom par bya//
- 30 このBCAのチベット訳はBCAt VIII-113c : bdag'dzin yoñs su dor ba (dañ)「自
我意識を捨てること」とするが、BCAPtはbdag lus yoñs su dor ba「自己の身
体を捨てること」BCAPt : D171a5, P189a4)とする(梵本BCAP欠)。
ātmabhāvaparitṛyāgaṃの訳としては双方可能であるが、BCAVIII-100 ~ 113cd
を一体の文脈として読むとき、BCAtの理解が妥当であると考えられる。
ちなみにMatics (1971)のみ the rejection of the bodyとするが、他はすべて
「自我意識を捨てること」に準じている：Possin (1907) : se dépouiller de
soi-même ; Finot (1920) : rejeter sa personnalité ; 金倉 (1965) : 「我性の捨離」;
Steinkellner (1981) : die Aufgabe des Selbst ; Crosby and Skilton (1996) : renouncing
one's own self-identity, etc.
- 31 Williams (1998) : p.104ff.
- 32 Schmithausen (1999) : pp.140-142.
- 33 本書の無我論は人無我と法無我(四念住による)よりなり、BCA IX-58 ~
78, 79 ~ 154; BSA VIII-37 ~ 56, 57 ~ 87にみられる。そこに説かれる無我
論については、江島 (1991) ; 斎藤 (1994a) : pp.(107)-(105)および斎藤 (1997)
参照。無我論の範囲について、Poussin (1907)、Schmidt (1923)、Steinkellner
(1981)、斎藤 (1997)はBCA IX-58 ~とするが、江島 (1991)、Crosby and Skilton

(1996)はBCA IX-57～とする。また無我論全体の分節は個々に異なっている。

- 34 na cāsti vedakaḥ kaścīd vedanāto na tattvataḥ/
nirātmake kalāpe 'smin ka evaṃ* bādhyate 'nayā// BCA IX-102
* Read as Ms. No.124 in the Beijing collection, China Library of Nationalities. See Lindtner (1991). cf. BCAt : de ltar bdag med tshogs 'di la// 'di yis ci ste gnod par byas//
- 35 Saito (2000)もこの両者を対応するものとして扱う。ただし以下に述べるように内容が全くといってよいほど異なることは注意しなければならない。
- 36 'phreñ ba はあるいは数珠であるかもしれない。この語はBCAt VIII-101にもあり、その梵文は pañkti となっているので、BSA VI-43においても同様に pañkti (行列)であった可能性は高い。しかし一般的には phreñ ba に対しては māla が予想されるのであり、ここでは後に続く chu rgyun nags tshogs との類似性を意識したチベット語の意を採った。Batchelor (1979)は a rosary と採る。この点については Williams (1998) : pp.113-115 参照。
- 37 この喩えにおいて挙げられている“chu rgyun” (水の流れ)と“nags tshogs” (森林帯)については興味深い事実がある。この両者は現行本 101 詩には現れないが、現行本に対する諸註釈のうち BCAP と BCAVi が後者に、BCAK が前者に言及しており、姿を消したはずの敦煌本の名残りが註釈の形で伝わっていた可能性がある。さらに、BSAPのチベット大蔵経編入に貢献した Bu ston は同註釈 BSAP を重視したとされるが(斎藤 (2000) : p.(119)), 自ら著した BCA の註釈の中でこの二項目をともにあげている(両語は BSAP に引用されている)。BCAP 335.2 : ādisābdān mālāvanādayo gr̥hyante / ; BCA Vi D 249b1, P297a8 : sogs pa'i sgras phreñ ba dañ nags la sogs pa 'o //; BCAK D 61a6, p 72b1 : sogs pa'i sgras ni chu'i rgyun la sogs pa bzin du brdzun te log pa yin no//; BCABu 470.3-5 (略); BSAP D 332a1-4, P376a7-b2 (略)
- 38 rgyud dañ tshogs śes bya ba ni// 'phreñ ba chu rgyun nags tshogs bzin//
dran dañ blo la rmoñs pa nmams// 'gro ba nmams ni gcig du sems//
- 39 ātmānaṃ ca parāṃś caiva yaḥ śiḡhraṃ trātum icchati/
sa caret paramaṃ guhyaṃ parātmaparivartanam//
- 40 yasminn ātmani atisnehād alpād api bhayād bhayam/
na dviṣet kas tam ātmānaṃ śatruvad yo bhayāvahaḥ//
- 41 ātmārthaṃ piḡdayitvā 'nyam narakādiṣu pacyate/
ātmānaṃ piḡdayivā tu parārthaṃ sarvasaṃpadaḥ//
- 42 ātmārthaṃ paramājñāpya dāsatvādy anubhūyate/
parārthaṃ tv enam ājñāpya svāmītvādy anubhūyate//
- 43 upadravā ye ca bhavanti loka yāvanti duḡkhāni bhayāni caiva//
sarvāṇi tāny ātmaparigraheṇa tat kiṃ mamānena parigraheṇa//
- 44 tasmāt svaduḡkhaśāntyarthaṃ paraduḡkhaśamāya ca/
dadāmy anyebhya ātmānaṃ parān gr̥hṇāmi cātmatvat//
- 45 ātmānaṃ aparītyajya duḡkhaṃ tyaktuṃ na śakyate/
yathāgnim aparītyajya dāhaṃ tyaktuṃ na śakyate//

- 46 hīnādiṣv ātmatāṃ kṛtvā paratvam api cātmani/
bhāvayerṣyaṃ ca mānaṃ ca nirvikalpyena cetasā//
- 47 dman pa la ltos* nas ṅa rgyal dañ/** mñam pa la ltos* nas 'gran pa dañ/mchog la
ltos* nas phrag dog skye bar 'gyur ba 'di ni byis pa' i chos yin te/.....'di thams cad
ñon moñs pa' i rgyu yin yañ bdag dañ gžan du brjes pas rnam par byañ ba'i rgyu ñid
du sgyur*** bar byed do// BCAPt D 176a5-6 ; P 195a2-3.
* bltos P ; ** / om. P ; *** bsgyur P.
- 48 eṣa satkriyate nāhaṃ lābhi nāham ayaṃ yathā/
stūyate 'yam ahaṃ nindyo duḥkhito 'ham ayaṃ sukhī//
140 詩の観察内容について、Finot (1920)、金倉 (1965) : p.164, n.9 は 141 詩
以下 151 詩までとし、Poussin (1907)、Schmidt (1923)、Steinkellner (1981) は
154 詩までとする。しかし、154 詩までがまとまって欠けている敦煌本
の存在は 154 詩までの一体性を支持するものであり、それはまた BCAPt
が 140 詩のねたみとおごりの観察修習に対する註釈においてそれを、
劣った者に対する慢心・同等の者に対する競争心・優れた者に対する嫉妬
とし、151 詩・154 詩の註釈はこの両詩を劣った者に対する観察と見ている
こと (BCAPt D : 177a5, 178b4 ; P 197a8, 197b8-198a1) からも補強される。
- 49 BCAPt D 176b1-2 ; P 195a6-7 : 'chad par 'gyur ba thams cad la gžan dañ bdag tu
brjes nas yod pa la sbyar bar bya 'o//
- 50 Crosby と Skilton はこの部分をかなり変わった冥想と見、それ自身有害で
であると評する。Crosby and Skilton (1996) : p.81.
- 51 Crosby and Skilton (1996) : do. 大西(1999) はこの詩群を、敦煌本が僧院などの
共同体で実践されるなかでの付加であると考える。大西(1999) : pp.(78)-(79).
- 52 江島 (1966) ; 斎藤 (1986) : pp.96-98.
- 53 Eimer (1981).
- 54 斎藤 (1994) ; 斎藤 (2001) : p.(20).
- 55 斎藤 (1994) : p.98 および註 (34).
- 56 BCAF : D 54a2, P : 64b4 ; BCA Va : D 127b3-4, P : 149b7. 斎藤 (1996) : p.592 ;
石田 (2002) : pp.115-116.